
10センチの超能力者

シェイカー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

10センチの超能力者

【Zコード】

Z6955Y

【作者名】

ショイカー

【あらすじ】

主人公芦屋礼はどこにでもいるような普通の学生。当然の如く近場の高校に入学したがその学校は超能力者収容学校という裏の顔を持ち、政府の保護の下霸権を争い4つの組織が戦闘を行っていた。芦屋も超能力者ではあるがその能力は『物を10センチ動かす』だけ。そんな彼は裏の世界で生きていく事が出来るのか！？

「平凡な日々が懐かしい…」

基本的には週一更新を目指して頑張ります。

入学式

俺が小さかった頃、両親は近所でも有名なオシドリ夫婦だったらしい俺が何かする度にきやつときや言つてたのを覚えている。

「ほら、積み木だぞ～」

父さんが楽しそうに三角形の積み木を手にとる。
母さんはその時家事をしていたんだろう。2階にはいない。
俺は今積み木のお城を建築中だ。

「あー…つー

もちろん3歳の子供がまともにしゃべれる訳もなく両手を上下することしかできない。

「ん?これじゃないのかな、じゃあこれが?」

父さんは三角形の積み木を置いて今度は立方体の積み木をとる。
違う。それじゃない。俺が欲しいのはそれ

「なつ…！か、母さん！」

父さんが目を見開いて1階へ駆け出して行つた。
俺が何をしたのか、それを母さんに伝えるために。

Prrrrr Prrrrr

「…………う～ん」

電話音に似た音を出す日覚まし時計は久々の仕事に張りきつたのか、普段より大きく響いてるような気がする。

寝ぼけ眼をさすりながら俺は体を起こしケータイを覗く。

4月9日 月曜日 7:01

「あ…………起きるか」

一度寝しない内に学校へ行くための身支度を始める。窓を開けると桜の花びらが中に入ってきた。

まずはトースターに食パンを一枚放り込み3分焼き上げる。その間に歯磨き並びに洗面を済ませテレビをつけ、食パンを取り出しジャムとコーヒーを用意してテレビの前にある机に置く。

「今日は一日穏やかな天気が続くでしょう、か」

てんびん座の運勢はつと…8位か。若干悪いな。

まあそんなのほどんどう気にしないけどな。うん、今日のラッキーアイテムはキシリートールガムか。

食パンを食べ終え、軽く口をゆすぐ血室にあつたキシリートールガムを1個口に入れる。

寝室に飾つてある真新しい制服に着替え俺は家を出た。

7:50

外は天気予報のお姉さんが言つていたような穏やかな気候、青い空には白い雲がちりばめられ桜の花びらが地面を彩る。毎朝ご飯をもらいに来る黒猫に残しておいた食パンの耳をあげて、俺は左手にある赤い屋根の家の方向へ歩を進めた。

去年まで通つてた道とは反対方向へ曲がり俺は新しい学校へと歩く事に違和感と不安を覚えたが学校に近づくと俺と同じく真新しい制服を着た生徒達が流れを作つている。

とりあえず道は間違えてないようだ。

俺のようすにテンションの低いヤツはほとんどいない、聞こえてくる話は「クラスどこかな」とかそんなありふれたものばかりだ。

またヒマで代わり映えしない毎日が始まるのか。

はたまた俺の人生觀をえてくれるような出会いが待つてゐるのか。後者であることを祈ると同時に何も起らぬまゝという否定的感情が浮かぶ。

我ながら冷めた性格だ。

俺はひとつ溜息をつき学校の門をくぐった。

今日は俺がこれから3年間通う陽光学園高校の始業式だ。

この付近には春央 立夏 秋栄 冬明と春夏秋冬の文字が含まれた中学が4つ存在する。この陽光学院にはその4つの中学から上がつてくる生徒が大半で、どこに所属していたか という話は他人と仲を深めるためには便利な話のタネとなる。全体的にまとまつた春央スポーツに力を入れる立夏 勉学にいそしむ秋栄 文化系の部活が豊富な冬明という話はここいら近辺では常識に近い。

ちなみに俺は家から一番近いという理由で秋栄に通っていた。

校庭には沢山の花びら、楽しそうな声がそれを際立たせていて、クラス分けの張り紙がされている柱に新1年生がワイワイとたかっている。

そんなところに入つていぐのもめんどくさいんだが行かなければクラスは分からない。
人ごみをかき分け俺の名前を張り紙から探す。

1-E 1番 芦屋 礼

あ から始まるから大体上の方に書いてあるのは助かる。
教室の場所を確認して俺は校舎の中に入つていった。

教室に入ると来る時間がまだ早すぎたのか余り人数が多くない。
目立たないように一番スミの席を選び腰を下ろす。

「よーお前もウチのクラスか?」

話しかけられ振り向くと身長175センチくらいの男子がにこやかに笑っている。

高一の始めて175センチは結構でかい。

「……いるんだから当たり前だろ、と言つてやりたいもんだがクラスのヤツにわざわざ悪いイメージを『』える必要もないか。

「ああ、秋栄出身、芦屋 らや 礼だ」

「俺は徳井 亮太だ、よろしくな。ところで秋栄ってことは頭いいのか？」

「ああ、まあな、金銭面的に私立にはいかなかつたけど」「どれくらいよ？」

「70くらいかな、こないだは少し良くて72だつたハズだ」

もちろん偏差値の話である。

家ですることも無く友達と遊ぶ金銭的余裕もないため仕方なしに勉強していたらここまで上がつてしまつた。認めよう、俺はぼっちだ。

俺の成績を聞いて徳井がいいヤツを見つけた的な顔をした。

「マジか…今度ちょくちょく勉強について質問したりするかもしないからよししくな…」

「……徳井はガタイ良いけど何かスポーツしてるのか？」

「ああ、バスケをやつてるんだ。立夏中の主将だつたんだぜ」

そういうて胸を張る徳井。立夏の主将とはかなりの実力者だな。たしか立夏のバスケ部は結構強かつたハズだ。興味ないからよく分からんけど。

そんな感じで徳井が中学時代の話を続けていると教室の前のドアが開いた。

「よーし、お前ら席につけ。体育館の準備が遅れているんだが、余った時間に自己紹介をしてもらおうと思つ」

そう言って入ってきたのはウチの担任だらうか? 時計の針を見るともう8時半になつている。

「よし、じゃあ出席番号順に名前を呼ぶから名前と何か趣味でもなんでもいいから言つていつてくれ。芦屋」

また俺からか。出席番号1番つてのはこことばかりではない。

俺は立ち上がり淡々とした口調で

「秋栄中出身芦屋 礼。特技でもないけど勉強は結構できます」とだけ言つて着席。

こんなことで目立つのもバカラしいし印象に残らないくらいが丁度いいだらう。

その後2番3番と順に進んでいき空席があるのに気がつく。

「出席番号1~5番の辻...はお休みか? じゃあ次1~6番の徳井頼む」

始業式から休むとは匂いがするな... ぼつちの匂いが。

最初に済ませた俺にとって2番以降はほほほヒマな時間でもある。すきま風に乗つて花びらが俺の机にやつてきた。

俺はそつと窓を閉めた。誰にも気づかれるこじもなく。

自己紹介が終わった後は体育館へと移動。もちろんこのクラス最初の団体行動である。

体育館につくとすでにたくさんのクラスが自分達の席に座り始業式の始まりを待っている。

俺達Eクラスの席は左側の真ん中あたりだった。

別に並びとかはどうでもいいようで俺の隣にはなぜか徳井が座っていた。

「おっす、さっき俺すげーもん見ちまつたぜ」

小声で話す徳井に俺も小声でかえす。

「何を見たんだよ」

聞かなくても予想はできている。

そして徳井の言つたことは俺の予想した通りのものだった。

「お前の横の窓がさ、『勝手に』閉まつたんだよ。誰に触られてる訳でもなく」

俺は一つため息を心の中でつき、そんなわけないだろ、とだけ言い返した。

『えー、では始業式を始めます

始まつたようだ。校長が壇上に上がりマイクを握つてゐる。

「なあ……」

「なんだ？」

「なんで校長先生仮面してんだ？」

「知るかよ。本人に聞いてこい」

あれは何の仮面なんだろうか。右目の部分だけ無いのも気になるし。

世の中には謎がたくさん、ということか。

ざわざわ…

『静かに、この仮面が気になる人もいると思いますが

ふんふん。何か理由がありそうだ。』

『これを付けてないと緊張してしまって付けてるだけです。気にしないでください』

期待した俺がバカだつたよ。

体育館の中にさらに不穏な空気が流れ出す。

当の本人は何でざわついてるか分かつてないようだ。あんな説明で納得させられると思つてたのか校長。

『えー気を取り直して、まずは各クラスの担任を発表します』

どつやら3年かららしく俺達1年は自分達の番を椅子に座り待つ。

『Eクラス担任、山本達次』

名前を呼ばれ立ち上がった人は体育教師なのか体つきのいい二十歳半ばの教師。

あれがどうやらウチの担任らしい。今朝来た先生とは違う。（後で知つた話によると今朝来たのは副担任だつた）

山本と呼ばれたその教師は俺達の座つてる場所を一瞥し小さく会釈した。

体育館での退屈な校長先生の話が終わり（座らしてくれるだけマシだつたけど）教室に戻ってきた俺たち。

すでに他のクラスから生徒が出てきて廊下を歩いていく。ウチのクラスはまだ担任が来ていないため終礼が始まらないため、文句を言つヤツもいたが何人かで固まつてワイワイやつてゐるヤツのほうが多い。

こうやってグループつてのはできいくんだな。興味ないけどさ。

そして残念なことに本人の意志に關係なく、勉強ができるといつ武器を持つてゐる俺も徳井のグループに取り込まれてしまつた。

「にしてもウチの担任イケメンすぎねー？」

「だよなあ、なんでも体育の時とか女子がきやつときや言ひひじいぜ」「マジかよ、ナルシストすぎんだな」

「なあ、お前はどう思つ虹屋」

む、話を聞いてなかつた。とりあえず無難に答えておいつ。

「俺もそう思ひ」

「だよなー」

よし、回避成功。

内心安堵していると話が次に移り、今度こそ聞き逃さないよう気をつけ。

「やつこやつないだぞ面白い話聞いたぜ」

「どんな？」

「なんとこの近くには幽靈屋敷があるやつ」

「幽靈屋敷？ そんなのホントにあるならもつとウワサになつてもいいと思つんだが」

「ところがどつこい、前住んでた人が出て行ってまだ1か月たつてないんだ。しかもそのたつた1か月で庭の草木が生い茂る幽霊屋敷に大変身したらしい」

「へえ」という声がみんなから漏れ俺以外全員のテンションが少し上がり、話が進む。

周りのヤツら何人かが振り向いたがすぐに自分達の会話の輪に戻つたようだ。

「んで、その幽霊屋敷はどんな人が住んでたんだ？」

「これも噂なんだが住んでいたのは画家らしい。んで屋敷の中にはその人の書いた絵が未だに飾られてるらしいぜ。しかも気持ち悪い絵ばっからしい」

「なーる。それは怖いけど面白いな

「じゃあよ！」

徳井が手をたたき、俺達は徳井に注目した。他のヤツらも見てるけど徳井は気にせず話を切り出した。

「俺達の親睦を深める目的で、行つてみねーか？」

「行くつて幽霊屋敷に？」

「おうよ、夜に全員で集まつてその幽霊屋敷とやらに繰り出そうぜ」

「おおー！」

「もちろん芦屋、いやライも行くよなー」

「な、なんでそななるんだよ」

「当たり前だろ、こいつのは全員で行つてこなーちゃんを迎えて行つてやるからさー！」

そういつて笑う徳井を一瞥し溜め息混じりに思つ。

所詮8位は8位か、
と。

幼なじみ

俺達が今生きているのは西暦2080年。あと20年程で某猫型ロボットさんの生まれた世紀へと移行する訳だが、今の所超ハイテクな日々が身近に訪れる気配はない。

代わりに俺達に訪れた世界は『超能力者の居る世界』だった。

アニメやマンガの世界でしか起こり得ないと思われていた事を彼らはその力をもつて起こして見せ、過去にどうやって作られたのか分からなかつた地上絵やミステリーサークルはその殆どが宇宙人ではなく超能力者によるものだということが最近の研究で分かっている。しかし今現在超能力者の絶対値が少ないこともあって超能力者は世間にあまり歓迎されていない。

どんなに些細な能力であつたとしても。

いわく『超能力者は人類の敵になりうる』とか、あまつさえ『超能力者は人間とは別の生物だ』とまで言う人が居るほどなのだ。たとえ超能力者であつてもそれを他人に公表しているヤツなんて政府直属の超能力軍に所属しているヤツらだけだらう。（もちろんその軍 자체の存在も危ぶまれている訳だが）

さて、話は変わるがあの後すぐに担任の山本が教室にやつてきて速やかに終礼が行われた。

遅れてきたこともあつて山本は簡単な自己紹介に配布物等を済ませただけだつたがクラスの女子生徒達はすでに色めき立ち、男子生徒達は対象的にイライラを募らせた。

そんなテンプレのような入学式も終わり（若干イレギュラーもあつ

たが）俺は徳井以下計4人で下校していた。

話題は最初、幽霊屋敷についての話がその大半を占めていたものの、時間が経つにつれ健康的な男子高校生らしい会話へと移つていった。今回の議題はクラスの女子生徒のランクらしく、福原さんは小柄で可愛いとか三森さんは胸がでかかつたとか女子には絶対聞かれたくない議論が続く。

「じゃあ1位は総合力の井上さんか？」

「いややつぱり福原さんだな。人形みたいでめりやくめりや可愛いいぜ？」

「黙れ口つコソ。女性と言えばやつぱり井上といは出でしめるといはしまる。これが大事だ。つまり三森さんこそ至高ー。」

「お前だつて結局外見じやねーかよ。なあライ」

「……お前らな、そういう話を公共の場であるのは止めりよ。どひで誰が見てるか分からんのだからさ」

「そんなこと言つてライも会話に入りたいくせにー」

「ライはこう見えてむつりスケベだと見たーをあ白状しな。どんな子がタイプだ？三森さんか？三森さんなのかな？そつと言えー！」

「お前の意見は聞いてねえよーほらライ、さつさとカミングアウトカモンカモン」

はあ…とんでもないグループに入つてしまつた。俺は仕方なく3人に思つたことを答える。

「俺としては特にこれといった好みは無いけど、強いて言えばこう…ミステリアスな感じの子が好みかな？」

一同がおーっと声を揃え一ヤニヤしだす。だから嫌なんだこうこうの。

「なるほどなるほど。どうかの見た目バカとは違う観点だな」

「バカだつてよ『デブ専』」

「お前に言つてんだるーがロリコン」

「あんだと！」

「やんのか！」

「あーバカ、お前ら落ち着け」

2人がケンカを始めようとするところを徳井が止める。まあ原因はお前なんだけどな。と心の中で毒づいて苦笑いしながらその光景を眺める。

俺の好みについてだがホントにこれといったものはない。ただこの人はどんな人なんだうと興味を持つてゐる人がいいのだ。

つまりミステリアス。

そんな事をワイワイ話しながら歩いていると俺の家のすぐ近くへと着き、俺は3人に別れを告げた後に最後の質問をさせてもらった。

「とこりでお前ら名前何だつけ？」

「「ひどつーー?」」

デブ専が原田でロリコンが小山らしい。

家の鍵をカバンから取り出し玄関を開けようとした俺はポストに手紙が入つていてるのに気づいた。

差出人のところには何も書いていない。

中身を見てみるとやはり差出人の名は無く、ただ一言『くたばれ超能力者!』という文字が書いてあつた。

名前が無くとも誰からの手紙かはよくわかる。今やどこにいるやら

俺の両親からである。

「はあ…またか」

ビリビリ手紙を破り玄関の鍵を開ける。

小説説明文に書いてある通り、俺は超能力者だ。能力はまあ残念ではあるが超能力者には変わりない。そして先程説明した通り超能力者は忌み嫌われる存在で両親は俺を小さい頃に里子に出してしまった。

里親は俺が超能力者であろうとなかろうと分け隔て無く育ててくれた、俺の中では本当の親父と母さんだ。

そして親父と母さんは俺が中学生の時、仲良くガンで亡くなってしまった。84歳と79歳だった。

ただ2人は保険に入っていたので俺が社会人になるまで十分持つお金が手元に残った。

そのため現在一人暮らし、毎日家事と勉強に追われる日々を過ごしている。

2階の自室へあがり着替えを済ませた俺はキッチンにある冷蔵庫を覗いたが、残念な事に食材が底をついていた。

カップラーメンも有るには有るんだが普段から栄養には気をつけているのでほぼ非常食扱いである。

「ん~、まあ丁度いいかな。晩御飯の材料も一緒に買いに行こう」

俺はささっと制服から着替え、ポケットに財布を突っ込む。桜の花びらがむなしく地面を彩る中空はきれいな青色を描いていた。

家からスーパーへは学校と真逆の方向に歩いて10分ほどだが健康の事も考え自転車は使わないよつにしている。じじ臭い発想だと自分でも思うがそういう性分だ。仕方ない。

時刻はまだ11時を回ったところ。12時半には昼御飯が出来上がる計算。

「ライちゃーーん！居るー？」

俺が家を出てまもなくそんな声が家の方から聞こえてきた。こんな真っ昼間に大声で人を恥ずかしい呼び名で呼ぶヤツなんて1人しかいない。

俺は曲がり角から家を覗く。

……よし気づいてないな。

「あーー！ライちゃんみつけ！」

「げ……」

なぜそこから俺が見えるんだ柚。

嬉しそうに走つてくる柚を見ているとまるでかくれんぼでもしているような錯覚を覚える。

「まつたくもーなんで私を置いていくかなー」

「じゃあ逆になんで待たなきやいけないんだよ」

「幼なじみだから！……つて置いてかないでよー」

バカな事言つてる柚を無視して歩き始めると柚が回り込んだ。
とへせねえなーとじつかの悪役みたいな言葉をばく。

「「ライちゃんはスーパーに行くのかな?かな?」

「…まあ、そうだな」

「じゃあついでに私の分もヨロシクウー」

「じゃあ食費払え」

「ああ… そんな。 しがない高校一年生のわたくしめにそんな大金を…」

「…」

「… いや150円あればいいんだが」

柚も食べるなら今日のチラシに書いてあつた焼きうどん（2人前298円）を買うとしよう。

確かに野菜はまだ冷蔵庫にあつたハズだし。（え？ 冷蔵庫には何もなかつたんじゃないかつて？ だつて野菜室には何もなかつたつて書いてないからな）

俺としてはかなり良心的な措置なんだが柚はその場に崩れ落ちる。

「ああ… 私の少なこお」づかこを… そんな…」

注、円500円もりります。

「そんなんに私から大金がほしいなら私を好きにしなさいーチラシ」

注、全然色っぽくありません。

「 もー じょうがないーはい 150円ー」

注、どう見ても6円しかありません。

「なんで6円しか無いんだ?」

いやー1畳玉と5畳玉に何もなしで150え。

「お金より時間が勿体無い。今回お借りせやん。

「やつふー！流石ライちゃん分かってるね！」

この「」の「」と肘で突きついてくる柚は無視して歩き続ける。

柏崎柚香は俺の家から隣に三軒右に住む同い年。お隣では無いので某双子の野球マンガ的関係ではなく、ただよく遊んでたってだけの関係だ。

たた小さい頃の俺は新に捨てられた事でかなり暗い性格をしてしまったが柚のおかげで少しずつ明るくなつた。

その件では感謝しているが、逆用仕事の件は、一数年

いつもこうで時々柚の母まで相伴預かることも。

俺はしきりに彼女の机を軽くあしらうたりしながらふと思つ。俺がミステリアスな子を好むようになったのは「イツのせいかもしない」と。

こうしてスーパーに着いた俺と柚は買い物カゴを一つ手にとり中に

入る。

俺が晩御飯の献立を考えつつ店内を回つていると柚が何かを持って来た。

ドサッ（ポテチ×5）

ガサガサ（俺がポテチを戻す音）

ペシンツ（柚が俺の頭を叩く音）

「「何すんだよ！（すんのよ！）」」
「てめえ昼御飯どこりかおやつまで俺に払わせる気か！」
「何よ！ライちゃんおごつてくれるって言つてたじやない！」
「昼御飯はな！おやつくらい自分で買え！そして太れ！」
「なつ！乙女に絶対言つてはいけない事をよくも！」
「誰が乙女やねん！」
「何で関西弁！？訳が分からないよ！」

「えええはあはあ言いながらお互いにらみ合つ。相変わらずふてぶてしくて遠慮を知らないヤツだ。俺達のケンカを見て人だかりが出来てるんじや？と思つた人は甘い。全部音量は抑えてある。そこまで俺達はバカじやない。

「とりあえず。おやつは自分で買え、もし俺の買い物力ゴにあやつが入つてたら昼御飯は作らないからな」
「むー……」

しぶしぶといった感じで柚がポテチを直しに行く。
あいつは何かやらないと気が済まないのか？
気を取り直して食材選びに戻ると柚が帰つてきて一言。

「私はカレーがいいと思うよ。」

… 晩も食べるつもりだらうか？

みんなで昼食

「いや～楽しみだねカレー！そして唐揚げ！つーん、たまらん」両手を振って喜びを表現する柚に女性に荷物持ちは似合わないよー」と荷物持ちは拒否されこちらは両手がふさがっている。

「後でおばさんから食材費もひりからな」

俺がそいつぱつといひりて振り返り返り柚が口をじがらせた。

「何よ。わつあおい」と言つたのは嘘な訳？

「昼御飯のお金は取らないよ。ただ300円へりこもりひつだけ

「もー。昔からワイヤーちゃんはケチだね」

「収入が無いからな。学費もバカにならないし仕方ないよ」

呆れたように言つ柚に弁解する。実際親父と母さんが残してくれたお金は余裕があるには有るのだがやはりお金はあつて困らない。ケチケチするのも生きるためである。

ここの中のスーパーのすぐ近くにはゲーセンがある。当然若い人が沢山いる訳でこちらを見てニヤニヤするヤジやらワタツコたような顔をするヤジやらがちらほらこちる。

「私達何に見えてるのかな？注目されてるね」

「勘弁してくれ。お前と付き合つてるとか変な噂が流れたら困るしわざわざと帰るぞ」

「もー照れぢやつてワイヤーちゃんは分かりやすいね」

柚がニヤニヤしながら後に付いて来る。

小説やマンガだとここで知り合いに会つたりするものだが、知り合いらしい知り合いなんて…

「…………」

「ん？ どうしたの急に立ち止まって。向こうに何か…」

「いやー楽しかったな！」

「ライもつれでくりや良かつたぜ。こじても小山ゲームつねえな。もしかしてゲームーか？」

「いやいやゲームは1日4～5時間しかやつてねーよ

「十分じゃねえかよ。…ん？ あれライじやねえか？」

「あ、ホントだ。おーい、ライー奇遇だなーこっち来いよ

「ねえライちゃん呼ばれてるよー行かなくていいの？」

俺はその場で立ち戻くすのみだったが徳井達から近づいてきた。いやな予感しかしないが無視して帰るほど俺は薄情ではない。とりあえず何か言われる前にこちらから抑えにいく。

「なんだお前ら家にも帰らずにゲーセン直行か。あ、こいつは幼なじみの柏崎柚香。昼御飯奢ることになつてさ。今買い物から帰ると

「」

「おう。あの後親睦会をしようつて話になつてな。それよりやけに饒舌じやないか。まさかその子幼なじみ以上の関係とか言わないよな？」

「隊長…どうやら2人で仲良く昼御飯らしいです！」

「なに…これはどういった関係か詳しく調べる必要があるなーよし…俺達の分も頼む。金は払うからー。」

「…嫌だと言つたら？」

「

「学校中にお前と柚香さんが付き合つてるとこう噂を流す」「あらび。じつするのライちゃん? 私としては友達が増えるのは歓迎なんだけど」

「あ、バカ……」

「……ライちゃん?」

「いや、別に幼なじみだから不自然でもないだろ? なあなんで青筋浮かべてるんだ?」

「だつて……なあ?」

「「なあ~」「」

「じゃあ靴は適当でいいから上がって」とは少ないが。

その後、俺達はスーパーで買い物をして帰宅した。

「じゃあ靴は適当でいいから上がって」「「お邪魔しまーす」「」

ライちゃんに促されて徳井、小山、原田の3人が靴を脱ぎ中へ進む。ライちゃん家は2階建ての木造建築でおじさんとおばさんとが居なくなつてから2階はライちゃんの部屋以外ほぼ使われることはないみたいだ。

「じゃあ柚は徳井達と一緒に部屋に行つとこてくれ。一応そこが密間になつてるから」

スーパーの袋から食材をいそいそと取り出しつつ私にお願いする。

「ここのでちょっとからかっても面白こかなと黙つたけどへそを曲げられ昼御飯が無くなるのは困る。

私はアイアイサーと敬礼して徳井達を奥へ案内し、畳部屋のドアを開ける。

畳部屋は6畳一間のスペースで定期的に掃除されているのか、全く使われていない部屋とは思えないくらいホコリひとつない。ライちゃん几帳面だね。

徳井達は適当な所に座りカバンを横に置く。私は彼らと若干距離を開けて座り雑談を始めた。

「で、柚香さんはホントのとこライと付き合つてるんすか？」

一番右に座つた…えーっと、小山？がそんな事を聞いてきた。ライちゃんと私が…ねえ。

「ん~ん。だつてライちゃんは私のシェフだからね。異性としては見てないよ」

シェフ…シェフだと…
バカな…ライを下僕扱いとは…

小山と原田は驚き、徳井は笑いを堪えてこりみつて見える。
何か間違つた事を言つたかな？よく分からぬから気にしないけど。

「で、3人はライちゃんと同じクラスなの？私はA組なんだけど」
「お、おう。同じクラスもとい友達だぜ」

あら。ライちゃんに初日から友達が出来るなんて。今夜はカレーね
！間違いなく！

「それは良かった。ライちゃんはあの性格だから友達出来るか心配だつたのよね~」
「あ~確かに」

「そつとしといてくれって感じの雰囲気だよな~」
「そつそつ。幽靈屋敷の件も乗り気じゃなかったし」

むー!幽靈屋敷ですと?

「ねえ、その幽靈屋敷って何なの?」

「ああ、幽靈屋敷ってのは(中略)って話。で俺達で行ってみようぜって事になつたんだ」

「へ~面白そ~な話ね。ねえ、その話私も参加したらダメっす~」
行きたいんだけど

私がwktkしながら身を乗り出すと3人もおー!と歓喜(?)の声をあげる。

「柚香さんも来るー!これでもか苦しさが半減だぜー!」

イエーと3人がハイタッチする。

「あ、私も混ぜて混ぜて~」
「「「「イエー~.」「」」

「みんな、焼きうどん出来~何やつてんだ?」

お盆に5人分の焼きうどんを載せふすまを開けたライちゃんは目を点にしていて面白かった。

焼きうどんを食べ終えた俺達は幽霊屋敷には口羅田に行くことにして、荷物の経費分担を決めようとした。そこで柚の提案によりポーカーをやって結果の悪い人が出費を多くする事になった。

よくわかる（？
ポーカー

用意するもの…トランプ、友達

まず全員に手札を5枚配ります。

次にいらないカードを好きなだけ捨て（何も捨てないのも有り）捨てた枚数分カードを山札から引いて手札確定。あとはその優劣で勝敗を決める。

カードの数字1、K、Q…4、3、2と弱くなり、ジョーカーを使用している場合同じ役だと必ず負けになります。

主な役（弱い順）

1ペア…同じカード2枚1組

2ペア…同じカード2枚2組

3カード…同じカード3枚

ストレート…カード5枚の数字が連続（ただしK、1、2と続いてはいけない）

フラッシュ…同じマーク5枚

フルハウス…同じ数字3枚に同じ数字2枚

フォーカード…同じ数字4枚

ストレートフラッシュ…同じマークで数字5枚が連續

ファイブカード…同じ数字5枚（ジョーカー必須）

ロイヤルストレートフラッシュ…同じマークで10～Aが揃つ。

ディーラーはなんだかんだで俺がすることになりカードをシャッフルして全員に1枚ずつ配つていく。

全員に5枚配り終わり中央に山札を置く。

（さて、俺の手札は…）

クローバーのA

ダイヤのA

ダイヤの2

スペードの5

クローバーの7

最初からワンペア最強のAが揃つ悪くない手札だ。ただマークが揃つてないからフラッシュは難しい。

とりあえず他のヤツらの顔を伺う。

まず徳井は普段のヤツとは思えないくらい無表情だ。ちよつと笑えるが手元を見るとちよつとカードが強く握られていて、あまり喜ばしい手札では無さそう。

小山はどうだろ？何かあからさまにあちやーって顔してるのが逆に怪しい。良い手札が来たと考えておいつ。

原田は一番分かりにくい。普段通りの態度を貫いてはいるが若干落ち着きが無いのが気になる。

最後に柚、かなり得意顔をしているが小さい頃から見てきた俺にはバレバレだ。嘘をついてる時耳が赤くなる癖が出てるので間違い

なく悪い手札だ。

続いてカード交換、柚が2枚、徳井が2枚、小山が1枚、原田が2枚それぞれカードを交換する。

最後に俺が残った訳だがそこで俺は上から5枚目のカードの隅が軽く削れているのを見つけた。

あれはジョーカーだ。使い古しているので俺には分かる。

(よし、あれやるか)

俺はA以外の3枚を捨て場に置き、そのままカードを3枚取った。

俺の手札は
ダイヤのA
スペードのA
クローバーのA
ジョーカー
ハートの8

見事にイカサマ成功。フォーカード完成だ。

「よし、じゃあ一斉に開けるぞ。せーの」

徳井の音頭に合わせ一斉にカードをテーブルに広げる。

俺Aのフォーカード(ジョーカーあり)

小山JとKの2ペア

原田9のワンペア

徳井〇のスリー・カード

そして柚のカードは…

「私の勝ちかな？」
なんと3のフォーカード。ジョーカーを使つてゐ俺は柚に負けてしまつた。

結果

原田と小山、徳井が出費することになり、柚は二ハマリしながらこつちを見ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6955y/>

10センチの超能力者

2011年11月27日10時48分発行